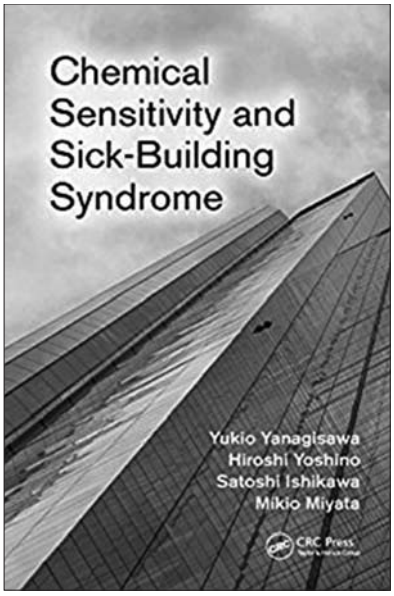
Chemical Sensitivity and Sick-Building Syndrome

Yukio Yanagisawa, Hiroshi Yoshino, Satoshi Ishikawa, and Mikio Miyata 編著

単行本，193頁，CRC Press出版（2017年1月11日出版）

本書は、世界に先駆けて日本が取り組んできたシックビルディング症候群（シックハウス症候群）と化学物質過敏症の病態解明、診断，治療，予防法や，その対処法，予防について，過敏症専門医，小児科医，疫学，建築学，化学，環境工学などの専門家14名が共同執筆したものである。本書の特徴は，シックハウス症候群と化学物質過敏症の歴史を紐解き，名称，病因論，発症メカニズムにおいて生じた論争について明記し，日本独自の診断基準の設定や治療法の確立をしてきた経緯，そして包括的立場から，建築学，化学，環境システム工学の専門家が13の室内空気汚染物質規制値の設定や建築基準法改訂などを行ってきた経緯を，15章にわたり詳細に述べていることにある。8章ではKlaus-Ditrich Runnow医師が紙上参加としてドイツの現状を日本と比較していること，最後の16章では，今後，増加が危惧される環境過敏症対策の展望について総合討論された内容が記されていることも大きな特徴である。

評者が感銘を受けたのは，石川らが，シックハウス症候群や化学物質過敏症とこれまでに環境汚染に由来して生じた水俣病などとの類似点に触れ，環境汚染が原因で引き起こされ科学的解明が難しい健康障害を解決するためには，自然科学的な側面だけでなく，社会的理解を深めるような公衆衛生的な立場からの社会科学的側面も不可欠であると，明記している点である。評者は，“環境過敏症はアレルギー疾患や生活習慣病と同様に，現代人なら誰もが発症する可能性がある健康障害であり，近い将来，患者が急増するのではないか？だが，医療関係者や研究者が過敏症に関する認知度を高め，各自が健康障害要因となりえるものを回避して生活すれば，その発症は予防できるのではないか？”と考えている。新たな患者発生を予防するためにも，日本が世界に先駆けて取り組んだ石川らの研究成果から学ぶものが多いと考える。病院，大学，公共機関の図書館の蔵書として，一人でも多くの医療関係者，研究者，行政関係者に，読んでいただきたい名著である。



（早稲田大学応用脳科学研究所・生活環境と健康研究会代表　北條祥子）